The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	私の国際協力
Author(s)	黒田, 篤槻
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 136-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55597
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

5-2
私の国際協力

黒田篤槻 大阪大学法学部国際公共政策学科卒

1. 国際協力への入り口

私が国際協力の道に関心を持ったのは、中学生のときに総合学習で行った劇がきっかけでした。私たちと同じ中学生の主人公は、劇中の総合学習の時間に「共生」というテーマで作文を書くという宿題を先生から言い渡されます。主人公が急な作文の宿題に文句を言いながら帰ったその日の夜、夢の中で世界中で起きている「共生」に反する数々の出来事、フィリピンでの児童労働や、ゴミ山で暮らす少女、アフリカの少年兵や、日本社会の中で孤立する老人たちなど……に出会い、そこで感じた思いを作文として書き上げる、というあらすじでした。私がその主人公を演じたのですが、思っていた以上に感情移入してしまい、「自分が暮らしている世界でこんなことが起きているのに、何も知らずに生きるのは嫌だ」「世界を変えたい。助けたい」と考えるようになりました。高校時代はとにかく英語を話せなければダメだと思い、頑張って英語の勉強をしました。また職業に関するイベントや修学旅行での企業訪問では決まって国際協力系の分野に参加しました。大学ではその思いを形にしたいと思い、大阪大学の法学部国際公共政策学科に入学しました。

2. 初めて自分の目で見る「途上国」

大学に入学し、難しい授業や課題に接する中で、「自分の目で実際に見てみたい。講義室じゃなくて、リアルなものに、人に接したい」と考えるようになり、私は途上国へ手軽に行けるスタディツアーを探しました。はじめは、友達に誘われ、カンボジアへのスタディツアーに参加する計画をしていましたが、パスポートが間に合わず断念。暇になってしまった春休み、どうしようかなあ、と考えている時、ふとTwitterであるスタディツアーの宣伝tweetを目にしました。『本当に貧困＝不幸ですか？スラムの子どもたちと出会う旅』という文章に、「貧困は不幸に決まっているじゃないか、何を言っているんだこの人は」と感じたのを覚えています。その『光の音符』という団体は、ダンスと音楽を通してスラムの子どもたちと関わり、子どもたちの精神の自立を目指す、ということを活動のテーマとしていました。

『ダンスと音楽』――聞こえはとてもいいですが、まさか貧困地域に暮らしている子どもたちがそんなことで救われるはずがない。そう思いました。ですが一方で、「これは大学で授業を受けているだけでは絶対に触れることのできない分野だ」ということに気づき、すぐに申し込みをしました。JICAの草の根技術協力事業の一つだったことも強く興味をひきました。こうして私は大学生になって初めてその夢の現場に立つことができました。訪問先の、スラムの教室で初めて出会う「恵まれない子供たち」は、なんと楽しげにダンスを踊り、笑顔で私と遊んでくれました。自分の想像していたものとあまりに違っていたことに素直に驚きました。「俺より元気じゃないか」そのときに、貧困がそのまま不幸や絶望を意味するのはないのかもしれないと気付きました。

3. 圧倒的な現実

一方で、典型的な「貧困」のイメージに沿うような場面に出会いました。観光地に向かうバスが交差点で止まったとき、赤ちゃんを抱いた5、6歳の男の子が走り寄ってきて、窓越しに物乞いをしてきたのです。その子は、「この赤ちゃんにご飯を食べさせたいからお金を頂戴」とジェスチャーしました。私は固まって、何もできませんでした。そうこうしているうちにバスは男の子を残して発車していきました。世界で苦しんでいる人を助けたいと思っていた私は、そのときに初めて、自分と世界の実態に大きな距離を感じ、打ちのめされました。これがわたしの初海外・初現場となりました。自分が想像していたよりも、そこに生きている人々はエネルギーに満ち溢れていること、また一方で典型

的な、ですが想像よりも圧倒的な大きさをもつ貧困を見ました。この二つの発見を得たことで、私はまた必ずインドを訪れようと決心することになります。

4. 再訪することで見えるもの

二回目のインドからは私はその団体のスタッフとしてスタディツアーを運営する側に回りました。約27名の学生を引き連れて再び同じ教室を訪れました。初めてそこを訪れる学生たちは、私のように、たくさんの発見と疑問を得ていました。私はというと、また新たな見方でそこにいる子どもたち、人々を見るようになっていました。いわば『家族』が出来たような気持ちでした。たった数日訪れただけの私のことを覚えていてくれたこと、また教室を離れる時に「日本に帰らないで。ずっとここにいて」という言葉をかけてもらえたこと。日本でも滅多に築けないような、親密な関係ができつつありました。「人が出会うということは、そこに関係ができるということ。そしてその人の人生に関わるということ」団体の代表である女性に口うるさく言われていた言葉の意味がわかったような気がしました。途上国支援、国際協力、などというととても大きく偉大なことをしているように聞こえますが、そこで起こっていることは(もちろん関わり方によりますが)『人と人の関わり合い』です。それが最小単位かつスタート地点なのです。この考え方は、今でも私の中の核になっています。

5. GLOCOLとの出会い

二度目のインド訪問の後、「総合大学である大阪大学なら、理系からアプローチする途上国との関わり方を実践している人もいるのではないか」と思い、探してみると、『適正技術』『BOPビジネス』という視点から途上国に関わろうとしているOUESTという学生団体を見つけ、『新しいアイデアを用いた技術やビジネスモデルを利用することで、途上国の抱える問題を解決する』という考え方を学びました。その時に、初めてGLOCOLの先生方と関わり始めました。そして知ったのが、GLOCOLが実施する、トランスカルチュラルスタディの授業でした。ちょうどその頃、インドでの人々

との関わり方、OUESTでのアイデアの見つけ方に悩んでいた頃でしたので、『いろいろな情報の見方、見つけ方を学び、フィールドスタディの基礎を学び、現地で実践をする』という機会に飛びつかない選択肢はありませんでした。そこでは、ヒアリングの技術や、情報を見る際の視点、さらに異文化に暮らす人と接する時の心得などを学びました。それまで、何も考えずにインドで人々と接していた自分に気づき、きっとこの技術を実践に生かすんだという気持ちを強く持ったことを覚えています。(意外と授業をよくサボっていたのも今となってはいい思い出……先生すみません)

6. バングラデシュでのフィールドワーク

無事(?)に国内での事前授業を終え、『適正技術を用いたBOPビジネスのアイデアを探す』という大義名分を提げて、乾季のバングラデシュに5人の学生、3人の先生方、というチームで向かいました。不運なことに、ちょうどダッカ市内で過激なデモが行われていたため、当初のスケジュールからは大きく変更がありましたが、ガンジス川を訪れたり、ジプシーの村を訪問したりすることができました。河の中州に住む人々が、ガンジス川の流量が増えることで岸が削れ、都市部のスラムに人が移動しているという話を聞いた時は、切り離して考えてしまいがちな農村と都市をつなげ、構造的に物事を見ることでいかに見える情報が変わってくるのかを学んだような気がしました。また、都市部にいる時間が短かったことで、農村部で多くの時間を過ごすことができました。私は初めてのフィールドワークでしたが、とにかく「人と人のコミュニケーション」なのだということを心がけ、多くの人と話をすることができました。ただ、それらから得られた情報がどれほど役に立ったのかは疑問です。体系的に情報を集める難しさを知りました。ちょうど大阪のNGOの開催するヒアリングの手法講座のようなものに参加しており、それも合わせて実践してみたのですが、どうにもうまくクリティカルな情報は引き出せなかったのではないかなと思い返しています。ただ、このバングラデシュでの数日間を通し、「本人が気付いていないことを引き出すことからはじまる」という本当に大切なことを教わりました。今までいかに目の前にあるものしか見えていなかったのかと反省することになりました。

7. インドのハンセン病に関わる

おそらく、私の大学4年間の中で最も多くのことを学び、感じたのは3年生の夏でした。ちょうどGLOCOLがプレ・インターンシップ制度として、海外で活動しようとする学生に助成金を出していたのです。なんと、『先着で面接して最高15万円まで補助』してくれるというこれ以上ない好条件でした。もちろんすぐさま応募し、（面接は無様なものでしたが）無事補助金を上限額までいただくことに。私がインターン先として選んだのは、インドで一緒に活動していたハンセン病患者に無料で医療を施すNGO、『Bombay Leprosy Project』です。日本ではハンセン病（らい病とも呼ばれていました）は、過去の病気でしょう。もともと伝染力は非常に弱い菌で、自然な免疫があれば、感染・発症は防ぐことができるのです。ですが、栄養状態が十分でない人が大勢居るインドでは、ハンセン病に感染する人々が未だに後を絶ちません。裸足であることも感染源を作る要因になります。私はドクターやスタッフとともにムンバイ市内のスラムへの出張治療、郊外の村への定期検診などに同行しました。各地で、ハンセン病であるがゆえに、コミュニティから疎外される人に多く会いました。顔、手足に症状が出てしまうため、感染を恐れて、人々が離れていくのです。ですが、人々が本当に恐れるべきはハンセン病患者ではなく、地面と直接接する裸足であり、貧困からくる栄養不足です。私は自分がハンセン病にかかってしまったがために、夫から家から出るなと言われている女性のことが忘れられません。またここでは、NGOを運営する難しさも教えてもらいました。彼らは毎日のように企業にレターを送ったり、古新聞、古雑誌を集めたりと資金集めに帆走していました。一方でスタッフのモチベーション維持も重要です。実際に所長に対する愚痴もたくさん聞かされました。これまで見えなかったこと、また「医療」という自分が関わってこなかった分野に入ってみることで、これまで見えていなかったものが見えるようになりました。例えば、その目でムンバイを歩いてみると、街角で物乞いをする老人はことごとくハンセン病にかかっていることがわかりました。私にはまだまだ見えてないものがたくさんあったのです。

8. 初めてのコンサート

そしてこの夏は、私にとって大きな転機となる夏でもありました。上記の『Bombay Leprosy Project』へのインターンと同時に、『光の音符』の活動で、支援先の教室に通う子供たちとコンサートを行った夏でもあったのです。私も子供たちと一緒にダンスを踊るため、コンサートまでの一ヶ月間、ダンスの練習の日々を送りました。朝は教室でダンスの練習、昼はインターン、夜はミーティングもしくはダンスの練習という生活でした。私は、子供たちと一緒にダンスをしているうちに、自然と子供たちと同じ視線になっていました。『同じチームのメンバー』として、日本人もインド人も、豊かも貧しいも、年齢が低いも高いも全部取っ払った関係だったと思っています。このコンサートの目的は、1つはJICA草の根技術協力事業の3年間の報告会として、自分たちがやってきたこと、また何が変化したのかを発表すること。もう一つは、子供たちに『与えられる喜び』だけでなく、『与える喜び』を体験してもらいたいということです。スラムに暮らす子供達は、『人から拍手を貰う経験』が欠如しています。自分で気持ちや考えを表現し、拍手によって承認、賞賛してもらうという機会が著しく少ないのです。スラムの子供たちが精神的に自立をしていくためには、自己表現を自信を持って行うこと、他者との関わり合いによって認めたり認められたりすることが不可欠であると考えます。このコンサートはそれを体現しようとするものでした。とはいっても、本番に至るまで、あるチームでは衝突が起こったり、全体での通し練習が全く進まなかったりと、トラブルの連続でしたが、子供たちは立派にコンサートをやり遂げました。中には、コンサートの数日前に、「自分たちでダンスを作ったからプログラムに組み込んで欲しい」と自発的にリクエストをしてくる子供達もいました。ダンスを通しての精神的自立という目的が、少しずつ実現されつつあるのではという思いに駆られた瞬間です。このコンサートの様子はYouTubeでも見ることができるので、興味がある方はぜひ調べてみてください。

9. 学生時代から今へ

このコンサートは、その次の年も、また次の年も、毎年恒例の行事になりました。第二回目の時はクラウドファンディングに挑戦し、賛同者の方々のおかげで無事目標額を達成することができました。私はというと、第一回目のコンサートでクラウンを演じたことがきっかけとなり、一緒にインドに訪れたことのある学生たちと、フラッシュモブを通して、思いを伝える『Happy Clowns』という団体を立ち上げました。これもインドでダンスの持つ力、自信を持って表現する力、というものに心を打たれたからです。今までの自分では到底考えられないような活動に携わることになりました。今ではその団体も後輩に任せ、私は現在インド資本のITコンサルティング会社で働いています。これから日本でも間違いなく注目度が上がってくるインドと、今度はビジネスという分野から関わってみようという試みです。まずはしばらく、『インド』という国と真剣に向き合っていきます。学生時代は社会の最も底辺に生きる人々と関わっていましたが、今度は世界中のIT分野の最前線で活躍するインド人たちと関わっています。この両極端をどうつなげるか、お互いのいいところをどう結びつけることができるか。それを今の楽しみにしています。

10. 私の国際協力

インドを通した私の学生時代は、私にとっての「国際協力」という概念を覆してしまいました。「助けに行く、変えにいく」というよりも、「自分で変わろうとしている人とたちと、一緒に変わっていく」ことこそが最も大切なことになりました。そしてそこには必ず『楽しさ』が不可欠です。眉間にしわを寄せて、何かを押し付けようとしても何も変わりません。単に最適の状態を提示するだけでも何も変わりません。何かが変わるべきだと思った時、それは相手も自分も一緒に変化しながら、そしてその変化を楽しみ

ながら右往左往することで、本当に価値のある変化がもたらされるのだと思います。そしてそれが私の関わりたい国際協力の形です。

11. GLOCOLへ

実践を第一として、学生の国際的な挑戦を応援するGLOCOLがなくなってしまうのは、とても残念で、寂しく感じます。「国際的に挑戦をしたい！」という学生は多いですが、自分だけで思うように機会を見つけたり、スキルを身につけたりすることはなかなか難しいものです。そういった機会への門戸を開いてくれるGLOCOLには、私自身も本当にお世話になりました。これから、私がどのように生きていくにせよ、GLOCOLの「実践第一」の心得を忘れずに、どんどん挑戦をしていきたいと思います。

最後になりましたが、今回このような場を設けてくださったGLOCOLの皆様、本当に有難うございました。将来またどんな形ででも一緒に何かできることを楽しみにしています。